

清末民国期華北西部の棉業

山 本 進

はじめに

陝西省のほぼ中央に位置する渭水盆地は黄河中流域と並んで古代中国における経済的最先進地域であり、秦から唐までの歴代王朝の多くは咸陽・長安や洛陽に都を置いていた。陝西の西側に位置する甘粛や東側に位置する山西もまた、比較的生産力の高い地域として知られていた。ところが宋代以降、江南の開発が進むとともに、経済の重心は華北東部や長江下流域に移動し、明代中期には江南デルタを中核とした全国市場が形成されるに至った。更に清代に入ると、長江中上流域や華南沿海部にも商品生産の中核地が分散し、全国市場から相対的に自立した地域経済圏が誕生した。この間、華北経済は相変わらず自給自足を基調としていたが、一八世紀には直隸南部から山東北西部にかけての地域に移入代替棉業が勃興し、粗布を山西方面や東北に移出するようになった。粗布の販売地からは主として穀物が移入された。当地域は民国期には西河棉区、御河棉区と呼ばれる中国有数の棉産地に発展した。

このような商品生産の全国的展開と地域経済圏の簇生の動きに、華北西部は全く取り残されていた。西部と東部の中間点に位置する河南は江南への棉花供給地として明代より名を馳せていたものの、山西・陝西・甘粛の華北西部三省は自給的棉業さえほとんど育たず、粗布や雑貨を華北東部や

華中南からの移入に依存していた。対価としての穀物流出を防遏し、地域経済を保護するため、「教民紡織」と呼ばれる官民による紡織業奨励政策も試みられたが、十分な成果を發揮することはなかった。総じて、古代の最先進地域は近代前夜には相対的貧困地域に成り下がっていたのである^①。

ところが、第二次アヘン戦争の敗北によりインド産アヘンの輸入が解禁された結果、中国ではアヘンの輸入代替生産が水面下で広まり、四川や雲貴そして華北西部では罌粟けしの栽培が盛んになった。山西・陝西・甘肅三省は一八七〇年頃には、高価ではあるが良質な国産アヘンの供給地となっていた^②。しかしなるほどアヘンの商品価値は相対的に高かったが、罌粟栽培は食糧生産を阻害した。光緒三・四年（一八七七・七八）に華北を襲った大旱災も、罌粟栽培がもたらした主穀生産の減少や地力の低下が被害を激甚にした側面が強い。清朝もアヘン中毒の蔓延が社会秩序を崩壊させることを恐れ、同治四年（一八六五）から光緒一六年（一八九〇）までは、国内でのアヘン生産を少なくとも建前上は認めてこなかった。だが、アヘン中毒者を矯正させることは容易ではなく、また鎮痛剤としての需要も大きかったため、官憲の弾圧だけで罌粟栽培を一掃することはできなかった。加うるに、罌粟栽培に対する課税は省や府州県の財政にとって大きな位置を占めていたため、督撫や州県官は本腰を入れて罌粟栽培禁止政策を遂行する意志を持っていなかった。光緒一六年に罌粟栽培が再び容認されたのも、地方衙門からアヘンに対する課税権を剥奪し、中央政府がこれを独占するためであった^③。

それでも、清朝が滅び中華民國が成立すると、罌粟栽培を禁止する必要性は次第に認識されるようになった。では、罌粟に代わる新たな商品作物として何が栽培されるようになったのであろうか。当時華北東部における商品作物の花形は、第一に棉花であり、第二に葉煙草であった。近代的な商

品生産としての葉煙草栽培は、民国初頭より、刻み煙草として用いる在来種から紙巻煙草の原料となるアメリカ種へと移行しつつあったが、アメリカ葉の生産は相当高度な技術と多大な燃料・肥料・労働力を必要としたので、その生産地は山東省濰県を中心とした膠済線沿線に限定されていた。一方、在来種葉煙草も引き続き生産され、農民の自家消費に供されていたものと思われるが、移出可能な特産地となると、華北では甘肅省蘭州や河南省許州などに限定されていた⁴⁾。故に、華北西部の低生産力地帯で比較的容易に栽培できる商品作物は葉煙草ではなく、やはり棉花を置いて他になかった。

しかしこれまで、この地域の棉業についての研究は全くなされてこなかった。その理由は、清末に至るまで棉業が発達していなかったこと、民国以降も生産量や移出量が取るに足らず、従って沿海部の紡績業との関わりがほとんど無かったことにより、手掛かりとなる史料がほとんど存在しないからである。また、罌粟であれ棉花であれ、商品作物の栽培は主穀生産の不足をもたらし、食糧の流通を惹起するはずであるが、当地域の穀物流通についても研究の蓄積は全くなされてこなかった。

そこで本稿では、清末の漢文史料を用いて、華北西部三省における罌粟栽培の蔓延と穀物流通の実態を概観するとともに、二〇世紀初頭から華北に経済的関心を寄せていた日本の調査資料を用いて、民国期における棉業の普及とその性格について検証する。そして両者を対比させることにより、民国期の棉花栽培が清末の罌粟栽培の代替となり得たか否かについて考察する。但し、東亜同文館や満鉄調査部による華北西部三省の調査は東三省や本土沿海部と比べ精度が劣るため、棉業を含め当地域の商品生産の実相を克明に描くことは困難である。本稿はあくまで乏しい史料に基づいた素描に過ぎず、詳細な分析は他日を期すことにする。

一 清代の山陝棉業と罌粟栽培の浸透

清末に至るまで、華北西部三省では棉業を筆頭とする商品生産がほとんど存在しなかった。ただ、隣接する河南省では清初より懷慶府・河南府・陝州直隸州・開封府などの黄河流域で棉作が比較的盛んに行われており^⑤、山西省の汾水流域や陝西省の渭水盆地にも微弱ながら棉業が浸透していた。

まず山西について。山西で清代より棉作が確認されるのは、省最南端の蒲州府・解州直隸州・絳州直隸州の三府州にほぼ限定される。蒲州府では、乾隆『蒲州府志』卷三、物産の項に、棉種が河南省より伝えられたこと、特に黄河を隔て陝州直隸州閿郷県の対岸に位置する永樂鎮の棉花産出高が突出しており、同鎮では河沿いの砂地でなおかつ水害の及ばない場所にて棉花が盛んに栽培されていること、棉布は各県で織られているが、榮河県産が優れていることなどが記されている。解州直隸州では、乾隆『解州平陸県志』卷二、物産の項に、平陸県では膏腴の土地が少ないため木棉を栽培し、棉花を販売して銀を獲得していると述べられている。絳州直隸州では、乾隆『聞喜県志』卷二、物産の項に、県の東郷では横水布と称される佳品を産出するとあり、民国『聞喜県志』卷五、物産の項には、井水灌漑が可能な所では二毛作が可能で、河川に隣接した丘陵地では麦・雑穀・棉花が栽培されているとある。一方、同じ省南部でも沢州府では、たとえば同治『陽城県志』卷五、賦役、物産によると、棉花の産額は多からず、外販がもたらす原棉に頼って棉布を織っているとあり、紡織業自体は存在するものの、棉作は盛んではなかった。

ただ、これらの記述から如上の三府州では乾隆期より棉業が盛んであったと結論付けることはで

きない。棉花の栽培には灌溉が不可欠であり、天水農法に頼る山西では容易に展開することができなかつた。蒲州府随一の棉産地が黄河に濱臨した永樂鎮であつたことがその事実を雄弁に語っている。同じ蒲州府でも内陸の臨晋県では、民国『臨晋県志』巻四、生業、農業の項に、「本県にはかつて渠道があつたが、久しく涸れて機能しておらず、灌溉の助けとはなり難い。水利の便が無いため、收穫は恒に不作にあえいでいる。……近年では少し棉花を植えているが、十中八九は失敗に終わっている」とあるように、灌溉施設が未整備な場所では棉作を根付かせることは極めて困難であつた。但し臨晋県自体は有力な棉産地の一つであつたらしく、『山西全省各庁州県地方經理各款説明書』によると、清末には毎年十万余千斤の棉花を産出しており、光緒三四年（一九〇八）省内唯一の棉花捐が課税されたとある。

民国期の調査も、清代汾水流域の棉業に対する評価は否定的である。『支那省別全誌』第一七巻、山西省（東亜同文会、一九二〇年）には、

山西に於ける棉花産地は主として汾河沿岸地方なれ共、従来肥沃の地は多く阿片の原料たる芥子の栽培に充当せられ、棉は僅に地方住民の自家用として栽培するのみにして、外省に移出せられざりしのみならず、却て年々西河方面より其供給を仰ぐの状態なりしなり（三四五頁）。

とあり、かつて汾水流域の肥沃な耕地は罌粟栽培に充てられていたため、棉業は自給自足水準に止まり、原料棉花を直隸省西河棉区より移入していた。また『北支棉花に関する一考察』（南滿洲鉄道株式会社天津事務所調査課、一九三六年）も、

河北平野及び黄河、汾河の本支流流域等は何れも沖積層であるが察哈爾、綏遠、山西には黄土層の存在が著しく多ほい。而して之等の沖積層及黄土層は水の滲透性に富み乾燥期には灌水を

絶対的に必要とする所が多ほいのである。かかる場合に際し平原地帯は河水又は地下水の利用に依り其の被害より免るるのであるが、高原地帯は河水の利用はもとより地下水深く遂に天然の力に抗する術もなく所謂飢饉地帯と化して「し」まうのである（一四頁）。

とあり、棉業発展の阻害要因が灌漑能力の不足であるという地方志の認識を裏付けている。

山西中部、すなわち太原府や汾州府などでは、棉作はほとんど不可能であり、棉紡織を行っている所でも原料棉花を直隸方面より移入していた。同治『榆次県志』卷一五、物産によると、「榆次県人は各家紡織に従事し、棉布生産が多く、家族の衣服や租税納付に用いられる。織布專業者は棉布を四方に販売し、榆次大布と呼んでいる。その一部は西北諸州県にも供給される。榆次大布は織り方が極めて精巧とは言えないものの、幅が広く緻密で耐久性もあるので、人びとは皆これを買求める」とあり、同治年間既に織布業が盛んであったことが知られる。しかし、乾隆『孝義県志』民俗、物産によると、「男女とも能く紡織を行う。所製の棉布は西北州県に販売される。しかし棉花は真定府などより産出され、平遙を経由して東来する。平遙から靈石・隰州に南行する棉花は、孝義より転販される」とあり、汾州府孝義県・霍州直隸州靈石県・隰州直隸州の織布業は直隸省正定府（真定府は明代の呼称）から汾州府平遙県を経由して移入される棉花によって支えられていた。太原府榆次県の織布業も恐らく同様であっただろう。平定直隸州では、光緒『寿陽県志』卷一〇、風土、物産、貨属に、「布。……直隸獲鹿・欒城等処自り来たる者有り。之を東布と謂う」と見え、東隣の正定府諸県より棉布を移入していたことが知られる。

山西北部に至っては棉花が全く自給できず、移入棉花を用いた棉紡織業さえ立地できなかつた。道光『偏関志』卷上、風土によると、一八世紀に知県が教民紡織を実施したとあるが、短期間で烏

有に帰した。その理由は木棉の自給が不可能であり、直隸省順天府・保定府からはるばる棉花を取り寄せねばならないためであったとされる。

次に陝西について。清代陝西の棉産地は渭水流域の西安・同州二府に限定されていた。西安府では、乾隆『三原県志』巻一、地理、物産に、農村では棉花を多く植え、棉布を織る者もままあるが、その布は湖広や河南からの移入品より優れているとある。しかし乾隆『統耀州志』巻四、田賦、風俗によると、近年また木棉を植え、紡織を行うようになったが、棉布生産は多くはなく、村落の外に販売することはできないとあり、移出に堪えるものは生産できなかった模様である。同州府も事情は同様であったものと見られるが、乾隆『韓城県志』巻二、物産に、堤防に近い土地では概ね木棉を植え、畝当たり収益は穀物作の二倍ほどに達すると述べられているように、陝西でも灌漑が容易な河川流域の低平地に棉花が作付されていた。棉花の有利性は知られていたが、川沿いの土地は水災の危険性を随伴しており、棉作専業農家はほとんど存在しなかったものと思われる。

以上のように、清代華北西部で棉業が見られるのは山西省南部三府州と陝西省渭水流域二府にほぼ限られており、また棉花は灌漑が比較的容易な河川流域の砂地に好んで栽培されていた。従って棉作が主穀作を阻害することはほとんどなく、また木棉の生産量もせいぜい自給部分を賄う程度であり、直隸・河南方面からの粗布流入を防遏する力量は持ち合わせていなかった。

このような穀物作中心の土地に突如として侵入してきたのが罌粟である。中国では罌粟栽培とアヘン生産は民国初期頃まで事実上野放しであったため、その価格は木棉と同じく純然たる市場価格で取引されていた。東亜同文会編『清国商業綜覧』第五巻（丸善、一九〇八年）によると、

鴉片ヲ栽培スルモノハ小麦ヨリモ八割ノ利益多ケレドモ之ヲ米ニ比スレバ利益少シト謂ハサル

ベカラズ。従ツテ米田ヲ変ジテ鴉片田ト為スモノナク、豆麦田ヲ変ジテ鴉片田ト為スモノ多シ。

南清ハ氣候暖熱ニシテ平坦膏腴、米作ニ適當スル地ハ悉ク拓テ水田ト為シ、鴉片ヲ栽培スルコト能ハザレドモ、丘陵山岳多クシテ水田ト為スベカラザル所ハ選ンデ鴉片田ト為ス。北清ハ氣候寒冷ニシテ米作ニ適セズ。且ツ丘陵山岳多キ地ハ鴉片ヲ栽培スルニモ宜シカラザルヲ以テ、

平坦膏腴豆穀ヲ栽培セシ地ヲ變シテ鴉片田トセリ（一四〇—一四一頁）。

とあり、罌粟栽培は小麦と較べ一八割の利益が期待できるが、米作より利益が少なかったため、華中南では水田から罌粟畑への転換は起こらず、水稻作が困難な丘陵地で罌粟が栽培されるに過ぎなかった（四川や雲貴はこれに該当するであろう）が、華北の平坦で地味豊かな主穀作地は罌粟畑となった。前出『支那省別全誌』でも、膏腴の地には罌粟が栽培されていると報告されている。新村容子によると、山西・陝西・甘肅三省のアヘンが開港場でマルワアヘンに匹敵する競争力を獲得したのは一八七〇年頃らしい^⑥。だとすると、華北西部の穀物作地帯で罌粟栽培が蔓延したのは一九世紀半ばの咸豊年間頃ではないかと推測される。

華北西部産のアヘンは四川・雲貴産より高品質であったと言われているが、主穀を犠牲にしなくてはならないという欠点があった。それでも同地方で罌粟栽培が蔓延したのは、やはり一攫千金を狙う農民の心理によるものと思われる。しかし同地方に対し安定的に主穀を供給できる後背地は存在しない。かかる綱渡りのようなアヘン生産が破綻したのが光緒三・四年の大旱災であった。

地方官僚はこの大旱災を通して、罌粟栽培の非生産性・非道德性ばかりでなく、後背地の主穀供給能力の低さ、換言すれば同地のアヘン生産の脆さを痛感した。光緒四年、山西巡撫曾國荃（光緒二年八月—光緒六年六月在任）の前工部右侍郎閻敬銘との連名の奏摺によると、「臣等が山西省の地

勢を観察したところ、南路は山嶺が重複し平地が極めて乏しく、北路は元より極寒で常に霜や雹に苦しんでおり、たとえ全面的に穀物を植えたとしても、通省の一年の食糧を供給するに足りない。ましてや耕地の半ばを放棄して罌粟を植えているのであるから、民食は欠乏せざるを得ない。省北部の大同府・朔平府・代州・忻州・帰綏七庁では以前より食糧生産が多く、毎年秋以降、糧商が北から南へ絶え間なく穀物を移出し、近くは省城まで、遠くは韓侯嶺を越えて販売していた。昔年太原・汾州二府では、粟米価格は常に北路の豊歉を基準として動いていた。また包頭から黄河を下り、蒲州府や絳州にまで達していた。しかし近年罌粟栽培が盛んに行われ、北路の沃野千里は半ば以上が罌粟畑と化し、農夫のアヘン吸飲者は七、八割に達している。民間の食糧備蓄は既に乏しく、採買を実施すればたちまち穀貴に陥るであろう」とあり、同省北部は寒冷で穀物栽培には適さないものの、かつては太原府や汾州府へ、更には包頭から黄河を下り蒲州府や絳州直隸州へ糧食を移出する余力があつたが、近年北部にまで罌粟栽培が蔓延したため、食糧供給力が低下したことが知られる。また曾国荃は続けて、「南路の平陽府・蒲州府・解州・絳州は陝西省からの米麦を大宗としており、古より舟運が盛んであつたが、回民反乱の平定後、同地でも罌粟を植える者が増えた。秦川八百里は、渭水が中央を貫流し、渭南が最も肥沃であるが、近年では遍く罌粟畑と化し、却つて渭北に食糧を仰ぐに至っている」と述べ、かつては山西省南部における最も有力な食糧供給地であつた渭水盆地でも、罌粟栽培が蔓延して食糧供給力が低下したと嘆く⁷⁾。

曾国荃は山西南部が山岳地帯であると言っているが、汾水流域は山西省で最も農耕に適した穀倉地帯である。そのような豊かな地域が渭水盆地や包頭方面から食糧を移入しなくてはならなくなつたのは、言うまでもなく同地でまずアヘンの商品生産が開始されたからに他ならない。しかしアヘ

ン生産の有利性は瞬く間に省北部や渭水盆地にも伝播した。そのため周縁部からの安価な穀物移入に頼っていた省南部は慢性的な食糧不足に陥り、光緒三・四年の旱災で大打撃を受けたのである。

曾国荃の離任後しばらくして山西巡撫となった張之洞（光緒七年十一月―光緒一〇年四月在任）も、類似の認識を持っていた。光緒八年の奏片によると、「たとえば先の大凶作の時、垣曲県ではアヘン生産が最も多かったため、餓死者もまた最も多かった。近日アヘン生産は交城県で最も盛んとなったため、糧価も交城が最も高い」とあり、大旱災直前では絳州直隸州最東部に位置し黄河に濱臨する垣曲県で罌粟栽培が最盛であったが、現在では太原府交城県が最盛となっていると報告している⁸³。この変化は大旱災により省南部が疲弊したせいでもあろうが、罌粟栽培の重心が徐々に北上しているとも解釈できる。彼はまた光緒九年の奏摺で、南の交城と北の代州が山西アヘンの二大特産地となっているとも述べている⁸⁴。

罌粟栽培の蔓延に伴う食糧不足に対し、張之洞が頼みとしたのは本来穀物生産に向かない関外すなわち内蒙古の包頭であった。光緒八年の奏摺によると、「山西の産糧地区は辺外薩拉齊庁所属の包頭鎮を置いて他にない。この地は黄河に濱臨し、商人が雲集しており、辺境の穀物は同地に集まる。その価格は常に賤きこと内地の半額であり、黄河を下ること一一〇〇里で磧口に達する。磧口は汾州府通判が統治しており、汾州府は陸路二八〇里東の距離にある。南行すると蒲州府に至るが、途中の龍王趙（平陽府吉州属）にて舟を換え剥運（平底の小船に積み替え、川岸から牽引して浅瀬を通過すること）しなくてはならならず、ともに水行一〇〇〇里の距離にある。ただ包頭から内地に入る時、黄河に大型船が無く、積載量が限られ、輸送費も少額ではない。そこで包頭に委員を派遣して局を設置し、穀価が下落した時に穀物を採買して倉庫に備蓄し、穀価が騰貴した時に磧口まで舟

運すれば、穀一石の販売収入で新たに三石を運ぶことができるであろう」とあり、あらかじめ包頭で穀物を採買して収貯し、穀価昂騰の折にはそれらを磧口鎮まで舟運して、磧口から汾州府や太原府へ陸運すべしと建議している¹⁰。龍王趙の浅瀬に阻まれ、蒲州府まで直接舟運することは困難であるが、磧口まで運べば包頭の穀物で山西中部諸州県を救済することはできると張之洞は考えたのである。

しかしながら、包頭に集荷される内蒙古の穀物程度で山西省を救済することは到底不可能である。かといつて農民の生計に配慮しない一方的な罌粟栽培禁止令は大した効果を發揮しない。そこで山陝の督撫は罌粟に代わる商品作物の栽培を奨励した。たとえば張之洞は生糸・木棉・煙草・藍の生産を奨励しており、また陝甘總督左宗棠は桑と棉花の栽培に着目している¹¹。左宗棠はまた、甘肅省寧夏府でも罌粟を根絶するため棉作を奨励している¹²。罌粟栽培は穀物生産ばかりでなく、もと山陝地方に存在した自給的棉業までも崩壊させており¹³、まずはこれを立て直すことが地域経済復興の近道と認識されたのであろう。

しかし一九世紀末までは代替作物を用いた商品生産の奨励政策は直ちには実を結ばなかった。それどころか山西の罌粟栽培地区は省北部へますます拡大し、光緒後期には太原府の太原・榆次・交城・分水各県や代州に加え、塞北の帰化城までもが罌粟の特産地として名を馳せるに至った¹⁴。民国期に至るとようやく山西省南部三府州と陝西省渭水流域で久しく途絶えていた棉業が再興するようになるが、これは教民紡織の成果というよりはむしろ、中国経済が世界市場に組み込まれ、これまで山西に土布を供給してきた直隸・山東棉業が原料棉花を天津や青島に仕向けるようになったためと考えられる。次に民国期の華北西部棉業について検討しよう。

二 民国期の新興棉業とその特色

山西南部や渭水盆地には清代より僅かながら棉業が存在したが、罌粟栽培の浸透以前から盛んに棉作を行っていたわけではなく、棉布の大部分は直隸や河南からの移入に依存していたものと思われる。従って民国期のこの地における棉業は、清代棉業の再興というよりはむしろ新興棉業の展開と捉えるべきかもしれない。

民国期には日本の手により各種の経済調査が実施されたが、華北においては東亜同文会の刊行した『支那省別全誌』が最も詳細な記録を残している。本章では『支那省別全誌』第一七卷、山西省（一九二〇年）、第七卷、陝西省（一九一八年）、第六卷、甘肅省（一九一八年）を主要史料とし、これに他の調査資料などを交えながら考察を進める。

山陝両省の棉業に関する『支那省別全誌』の共通認識は、第一に罌粟栽培の代替生産であること、第二に在来種ばかりでなく米棉種も種植していること、この二点である。まず山西省から検討する。前章で引用した『支那省別全誌』山西省の文章の直後には、

然るに阿片禁止令と共に芥子の栽培地は直ちに棉花の栽培に變じ、近年は年と共に其作付段別の増加を見、産額亦漸く増大し来り、今や地方民の需要を充すの外、天津、漢口等の市場に移出せられ棉花輸出業者の注意を曳くに至れり。殊に其品質全く直隸方面の物と異り、纖維長く柔軟にして紡績用に適することを認められ、俄に省内主要物産の地位を占むるに至れり。然れ共既述の如く一般に頗る乾燥し、且つ肥沃の地甚だ少きが故に、其栽培区域も自然西南方汾河

流域一帯の地に限られ、東部及北部地方には其産出を見ず（三四五―三四六頁）。

と記されており、近年の罌粟栽培禁止令により棉花の栽培が開始されたこと、在来種の直隸棉とは異なり（米棉種の）山西棉は機械紡績に適するため、天津や漢口への移出機運が高まっていることが知られる。但し「品質及種類」の項には、

一般山西棉と称すれ共、其産地に由り品質を異にし、洪洞、曲沃、蒲州等の産は純然たる支那種にして、天津青島より盛に輸出する西河及御河棉に類せり。即ち纖維堅く且短く、而も太きが故に細糸を紡ぐに適せず。故に多く地方に供給せらる。栄河一帯は地味肥沃にして支那産の栽培に適せざるが故に、多く米國産を栽培す。其纖維柔軟にして且つ長く、最も十六「番」手以上の紡績に適すと雖も、土人は敢て之を好まず、地方需要少きが故に殆ど産額の全部漢口天津に輸出せらる（三五―三五二頁）。

と記されている。これによると移出向け米棉の主産地は栄河県に限定されており、旧平陽府の洪洞県や曲沃県などでは相変わらず在来棉が播種され、大部分は地域内消費に充当されていたようである。

しかしながら、この時期既に在来棉は減少傾向にあり、米棉の割合が高まりつつあった。『中国実業誌』山西省、国民党政府実業部国際貿易局、一九三七年、八九―九〇頁（『中国近代農業史資料』第二編、生活・読書・新知三聯書店、一九五七年、一九八頁所収。原資料は未見）によると、民国一〇年（一九二一）には棉花作付地の約三分の一で米棉種が栽培されていたとある。

一九三〇年代になると、山西の在来棉は米棉によりほぼ完全に駆逐される。前出『北支棉花に関する一考察』五―七頁に記載された「北支三省棉産統計」（国民政府の「中華棉産統計」を引用）によると、河北・山東・山西三省の繰棉生産量および総生産量に占める米棉の比率は、一九三二・三

三・三四年の三年の平均値で、河北が約一八四万担（三四・一％）、山東が約一五三万担（四三・八九％）、山西が約三九万担（九四・五五％）であった。山西の繰棉生産量は河北や山東の数分の一程度であるものの、米棉種への特化という点では両省を凌駕しているのである。なお、馬場鋏太郎『北支八省の資源』（実業之日本社、一九三七年）「各省植棉状況」の節に、

山西省では汾水及び黄河本流の流域に産する。本省の棉作は地勢上、河東区及び冀雁区の二大区域に分たれるが氣候の關係上冀雁区の棉作は著しき発達を望み難く、全省産額の九〇％を占むる河東区の将来のみ期待されてゐる。河東区は介休以南汾水の流域より黄河に亘る三十五県を含み、気温高く灌漑の便あり、臨汾には棉業試験場を有し、本区棉産の中心をなしてゐる（二二五頁）。とあるように、省内の主要棉産地は清代と同様汾水流域の河東棉区に限定され、太原盆地へ進出することは困難であった。

次に陝西省について見る。『支那省別全誌』陝西省に、

棉花の産地は西安の東北方高陵を中心とし渭水の南北数十支里に至る平野にして臨潼、渭南、高陵、三原、涇陽、蒲城、富平、同州、朝邑の各県とす。就中産額多く且棉花商人の最大なるものは渭南交口鎮（臨潼県下）、三原、涇陽の各県とす（三七―三八頁）。

とあり、渭水流域の平野部が棉産地であった。その一つである三原県を採り上げてみると、光緒『三原県志』卷三、田賦、物産の項に、

独り棉のみ有用なり。亦開花す。東南郷之を種うれど、広まること能わず。他処は則ち全く無し。故に紡織する者少なし。老農或いは言えらく。土宜の然るに非ざる耶。罌粟来たりて自り、種うる者少なし。近くは厲禁せられ、遂に絶てり矣、と。

とあるように、一九世紀後期には罌粟栽培が猖獗を極めたようである。しかし『支那省別全誌』は三原県の生業及び商況について、

阿片禁種の令行はれてより、昔時阿片の栽培地たりし該地方は一変して棉花の産地となり、渭水流域の各県城は総べて棉花の取引市場となれり（五七頁）。

と述べており、同書が刊行された一九一〇年代後期には棉花の主産地になっていた。県志も省別全誌も罌粟栽培禁止令により作付転換が成功したと認識している。

三原県と並ぶ棉産地の渭南県も事情は同様であった。省別全誌は渭南県の工業について、陝西省は元来は棉花を産すること多からず。其他の産物も従来外部に出ること少かりしかば、世人之を知るもの殆どなかりしなり。然るに近年阿片栽培禁止令漸く嚴となり、地方官は常に兵を派して阿片栽培者を検挙し、若し栽培せるものを発見するときは、直に之を發掘して枯死せしむる等、所有手段を講じて之が根絶を謀れり。張鳳翽陝西の都督として着任するや禁煙の命更に嚴に、毫も仮借する所なかりしかば、人民は漸く阿片栽培を廢し、之に代ふるに棉花栽培を以てせり。然るに棉花は阿片に比し栽培容易にして、手数を要せざると収益の比較的大なるが為め、その栽培は年と共に激増し、今や陝西棉花の名は世人の注意する所となれり。而して官憲も大に之を保護奨励し、所有便宜を謀り、一方に於て又嚴重に之を取締り、奸商の所為に依り陝西棉花の声価を傷くることなからんとを期せり。

渭南は陝西棉花の叢淵にして、北方三原と共にこの地方に於ける一大集散地をなせり。その産地は県内に到る処産せざるなきも、渭水以北を以て最も大なる産地となす。而して臨潼、渭南、渭南、華州等に産する棉花も一に渭南棉と称せられ、相場等みな其の影響を受く。（中略）

概して此の地方に産する棉花は他のものに比し纖維長く、品質良好なり。殊に近來栽培数を増加したる洋花の如きは相当の良品を出しつゝあり。されど産額の増加につれ外省より買出の爲め来る商人多きを加へ、取引の盛大なると共に所有奸手段を以て重量を増加するの風を生じ、水を含ましめ又は雜物を混ざる等の弊害百出、一時はその弊に堪へざることありしかば、地方官は其制裁を嚴にするに至れり。加ふるに商会組織せられ、市内の重要商人皆其の會員となり以て叙上の弊害を除去し、陝西棉花の外部に於ける販路を拡張せんと力めたる結果、近來やゝその弊を減ずるに至りたりといふ（五三二—五三四頁）。

などと述べており、ここでも民国期に罌粟から外来種（印度種—後述）棉花への作付転換が進み、棉花の省外移出も活発になつていたことが確認される。陝西棉の集散地は渭南県と三原県であつた。以上のように、罌粟栽培の代替として再登場した民国期の山陝棉業は、清代の在來型棉業と同じく汾水流域と渭水盆地に立地しつつも、在來種に加え新たに外来種を導入することにより大きな変貌を遂げたのである。

ここで注目されるのは、山陝の新興棉業が移入代替生産だけではなく開港場への移出も積極的に行つている点である。まず山西棉について。山西棉が始めて天津に移出されたのは辛亥革命直後の一九一二年のことらしい。『支那省別全誌』の記載によると、

山西棉は大正元年秋始めて太谷、祁県附近の商人に依りて買集められ天津市場に出されたり。……即ち紡績用に適し、輸出上の価値多き美国種棉は廉価にして、生棉若くは毛綿混織等特殊の需要に供するに過ぎざる草棉の方価高く、世界一般の棉花格付に反せる状態を呈せり（三三三頁）。

とある通り、山西中部の太谷・祁県商人が買い付けに当たつたが、当初は紡績用に適した米棉より

混紡用の在来棉の需要が多く、取引価格も高かったらしい。しかし、

然れ共世界棉需要の大勢に伴ひ斯かる相場も漸次其跡を絶ち、土民も米国種の高価なるを知るに至り、天津、漢口等の相場を看て売出すに至れり。大正五年の如きは米国棉、印度棉の不作と、南支那の作柄良好ならざりし結果、従来十六両内外に取引せられしもの其産地に於て尚十兩内外を称へ、天津相場より却て高価にして、輸出商も一時取引に困難を感じり（三五四頁）。とあるように、一九一六年になると米棉種の価格優位性が生産者にも知られ、また天津に加え漢口への移出も盛んになった。漢口へは、

山西省南部地方は従来漢口の商圈内に属するを以て、棉花も多少黄河を下り、鄭州より京漢鐵路に依り漢口に出されしことありしも、大正元年よりは主として天津に仕向けらるゝに至れり（三五四頁）。

とあるように、辛亥革命以前より小規模な移出が始まっていたようであるが、民国以降は天津が仕向地の首座を占めるようになった。

一方、陝西棉も一九一四年頃から生産量を大幅に増大させ、繊維の長い印度棉を漢口や天津へ移出するようになった。『支那省別全誌』には、西安市場の状況について、

阿片禁止の結果大正三年以来著しく其收穫を増加し、一箇年凡そ八千万斤を産すと。而も其品質は五、六年前迄は改良せざるため不良なりしが近年印度棉種を輸入、播種してより頓に其收穫を増加し、品質亦良好となり所謂漢口棉なる漢水沿岸の棉花と共に名声漸く高く、漢口、天津市場に出で殆ど印度棉に拮抗するに至れりと云ふ。棉花の相場は常に天津、漢口殊に漢口の市価を標準として相場を定む（三七頁）。

と記す。しかし別の箇所では、西安に集荷される陝西棉の販路について、

西安棉花は既述の如く販路に困むか故に本省内主要なる棉産地たる渭南、三原、涇陽、同官、高陵等を加へて産額合計約二十万担「担」ありと雖も右の内外部に輸出せらるゝものは僅に其の半に過ぎざるなり（五四四頁）。

とあり、また、

若し此の地にして運輸交通の便開け低率なる運賃を以て棉花を開港場に出するを得ば、その声価今日に倍するものあるべきは何人も認むる所なれども、現今の状態の下にありては、折角の棉花も十分なる需要者を発見すること難し（五四二頁）。

此地棉花は販路充分開けざる為め、供給常に多く、相場は著しく低きを常とす。即ち西安以西には大都会の棉花を需要するものなく、只僅に地方人民が内職として少量の棉花を使用し、製糸機織に従事するものあるのみ。加ふるに各地方とても幾分の産あるを以て西安棉花の西部に至るものは甚少し。東部地方には臨潼、渭南等の陝西省に於ける大棉産地を控ゆるを以て、西安棉花の是等各地方市場を侵すことは殆んど不可能とす（五四三—五四四頁）。

などとあるが如く、省外への移出量は半分以下であり、また省内市場も狭小であった。文中「大棉産地」と称えられている渭南県でも事情は同様で、東亜同文会の調査者は渭南棉花の移出が困難な理由を「是れ棉花の栽培が近年阿片に代りて急激に増加したる為め需要之に伴はざるの結果を生じたるによる」（五三五頁）ものと断定している。

山陝棉業の發展には督撫や軍閥などの地方政権も大きく貢献した。陝西では、光緒『大荔県統志』巻四、土地、物産に、「左爵相（左宗棠）が棉書を頒布してから数年後、県内で棉花を種植するもの

が漸増した」とあるように、清末の督撫による教民紡織政策が奏効した地域もあったようであるが、民国期の山西では省経済の自立政策を掲げた閻錫山が積極的に棉業普及に取り組み、かなりの成果を挙げていた。南満洲鉄道株式会社調査部編『北支棉花綜覧』（日本評論社、一九四〇年）によると、

山西省の植棉事業の歴史は極めて新しく、清末の頃河東地区に少量の産棉を見た外、棉花の栽培せられるものは殆どなかった。然るに民国七年閻錫山省長に就任するや、所謂山西モンロー主義を振翳して大いに省産業経済の開發に意を用ひ、……民国六年の全省棉田面積は僅に二十万余亩に過ぎなかつたものが民国八年には四十八万余畝、同九年には一躍して八十三万余畝に増加するに至つた（一〇九頁）。

とあり、日本の調査機関は閻の殖産興業策が山西棉業を大發展させたものと見ていた。中国側資料では、前出『中国実業誌』に「民国元年より米棉種の試験栽培が開始され、当初数年間は試行と挫折の繰り返しであったが、第一次世界大戦を契機として、民国八年頃より棉花栽培の有利性が農民の間に浸透し、棉花作付地は民国六年の二十余万畝から民国九年の五十余万畝、民国一〇年の六十余万畝、民国一二年の八十余万畝へと著しく増加した」という内容の記述があり、如上の認識を裏付ける。

閻錫山は山西省長就任後、山西村政処を拠点として、本格的な近代化政策を開始した。民国一八年、同処が編纂し刊行した『山西六政三事彙編』卷三、令文によると、棉業振興に関する指示は民国六年一月七日付「訓令河東道属各県俟棉種發到広為分配勸種文」を嚆矢とし、省内全域を対象に振興が図られた。ただ同書の附表によると、棉作の適地はやはり河東道に限定されていたようである。また所収の訓令や指令には棉作奨励と罌粟栽培禁止との関係については全く触れられていな

い。閻は山西棉業を罌粟栽培防止の手段としては認識していなかった。

なお、アヘンの吸飲は習慣性が強いので、たとえ罌粟栽培を全面的に禁絶し得たとしても、中毒者に対して暫定的にアヘンを販売する必要がある。山西ではこれを「戒煙菓餅」と称し、閻錫山の設置した禁煙考核処がその販売を独占したが、皮肉なことに一九三〇年代に至っても「菓餅」の専売収入が省財政の半数前後を占めていた¹⁵⁾。

かくの如き山陝両省の発展とは対蹠的に、清末まで棉作の経験を持たなかった甘肅省では新興棉業は定着しなかった。『支那省別全誌』甘肅省によると、

甘肅の地は辺境にして其氣候の如き東南各省に比較するを得ず。今同省に於「け」る産業に徴して其氣候を見るに東涇州、西敦煌、高台、南階州、文泉皆棉花の産あり。由来甘肅は土厚く地広きを以て洮沙、岷州、西寧等は氣候寒にして棉花の産なし。安西、肅州、甘州、涼州、鞏昌、秦州、寧夏、平涼、慶陽の如きは種棉に適せざるに非ざれども風氣未開の民多く、漸く試棉するに止め、多く土民は地の適せざるに託して敢て農事の改良に留意せず。近年阿片の栽培を嚴禁し、之に代るに棉花の栽培を以て極力奨励に力め、兼て織布の法をも講究するに至れるは喜ぶべき現象なりとす（四九九頁）。

とあり、一九一〇年代に至っても棉花栽培は実験段階に止まっていた。同書、第一〇編、内外輸入品の項を見ると、陝西省邠州の西に位置する涇州・平涼・隆德三地区では「棉は陝西省謂「渭」南、三原地方に産するものが直接当地に移入せらるるもの及び、西安商人の手を経て当地に来るもの」とあり（七一四頁）、青海省と隣接する西寧県城では「移入外省品の主なるものは棉花、白糖、川烟、陶器等なり。棉花は西安方面のもの平涼に輸入せられ、平涼より当地に移入せられ、及び陝西省の

棉花移出地より帰り荷として人夫の負ひ来るものあり」(七二七頁)、会寧県・西鞏駅では「棉花は陝西省西安方面より来るものなれども、平涼商人の手を経て移入せらるゝもの多し」(七二〇頁)、蘭州府城・安定県城では「棉花及綿布は共に西安、三原地方より来るものにして白大布最も多し」(七三〇頁)、鞏昌府・渭源县・寧遠県城では「外省移入品として見るべきものは棉花、大布、白糖等にして、棉花、大布は陝西省西安及三原より来り……」(七三六頁)などあるように、いずれの地域でも西安から棉花や棉布を移入していた。

棉業が存在しないことは罌粟栽培が根強く残存していることの裏返しである。『支那省別全誌』の調査者は平涼県(五一八頁)・隆徳県(五一九―五二〇頁)・金県甘草店附近(五二四頁)・沙泥県(五二八―五二九頁)・渭源县(五三二頁)・成県(五四一頁)などで罌粟栽培を目撃したり、その存在を推測したりしている。なお平涼県の項に「本年(大正二年)迄栽培を許されし為め、今此の収穫を見たるも明年より之が栽培を許されずと語り居れり」とあるように、民国二年(一九一三)までは栽培が許されていた模様である。

ただ、この調査者は甘肅省より新疆省の方が状況がひどいと見ている。同書には、
 前清宣統年間の奏摺に拠れば、新疆に於ける阿片喫烟は已に悉く禁止せられたりと称すれども、欺罔の言之に過ぐるものなしと謂はざるべからず。今実見者の言に拠れば、上は官界より下乞食の徒に至る迄阿片を喫せざるもの絶えて少なく、多少文明の空気を吸へる読書人にして尚此悪習に沾染するものありと云ふ(五一四頁)。

従来肥沃の土地は悉く阿片の原料たる罌粟を植付たるも、近来其收穫充分ならざるの地あり。然れども山環水抱の地区は皆之を播種せざるなく、甚しきに至りては某国地界内に至りて土地

を租り、某国人を雇用して之を植ゆ。伊犁・塔城一帯に於て紅白燦爛たるものは皆是れ罌粟の花なり。而して田畝に従事する老若男女は悉く其收穫をなすものなりとす（五一五―五一六頁）。とあり、新疆では罌粟栽培とアヘン吸飲が野放しにされていること、ロシア領（カザフ地方）で罌粟栽培を営む者もいることが報告されている。その後国民政府が新疆省を掌握すると、罌粟から棉花への作付転換が進展したようであり、吐魯番・鄯善・伊犁・綏来などでは棉花が栽培され、その大部分をソ連に輸出するようになった⁽¹⁶⁾。

話を山陝棉業に戻そう。民国期の山陝棉業は在来棉業の単純な発展の延長線上にあるものではなく、罌粟栽培を駆逐するため省政府によって政策的に導入されたものであった。この頃既に棉花は織布手工業の原料ではなく機械紡績業の原料となっていたため、省政府は繊維の長い外来種の栽培を奨励し、これらを天津や漢口へ移出しようとした。その目論見はある程度達成されたが、直隸や山東と較べると生産量は圧倒的に少なく、また生産地も河東棉区と渭水盆地から北上することはなかった。更に産地が内陸部に位置するため消費地までの輸送費用がかさみ、これが棉作の普及を阻害した。そこで山西棉業は省内の新土布業に新たな販路を見出した。

縦糸に洋糸を、横糸に土糸を用いながら手工業形態で棉布を製織する新土布業は直隸省高陽県が最も著名であり、山西にも相当量の高陽布が流入していたが、これに刺激され山西の平遙県や祁県でも土布生産が興起し、省内市場を奪還するとともに、内蒙古・陝西・甘肅・寧夏など最周縁部へも土布を移出するようになった⁽¹⁷⁾。閻錫山は民国二十一年（一九三二）に至っても、山西では棉織物業が未発達なため、毎年土布の移入に八〇〇万元以上を費やしていると嘆き、村政処に命じて手織り土布生産の振興を命じている⁽¹⁸⁾。

山西で最も著名な土布産地は平遙県である。平遙土布業は清末民初頃、県城内に公益生織布工廠、織業工廠という二つの織布業者の出現に始まると言われる。当初は天津方面より移入した機械製棉糸を原料とし、手織り機を用いた家内手工業に止まっていたため、生産量も極めて少なかった。だが民国七、八年頃より布荘が機戸に棉糸を貸与して棉布を収集する問屋制が普及し、また織機も旧式の木機より生産性が三倍優れた鉄輪機が採用され、更に民国一三年、榆次に紡績工場が設立されたことにより、平遙土布業は急成長を果たし、陝西や甘肅にも販路を拡げていった¹⁹⁾。河東棉業は平遙の土布業や榆次の紡績業に原料棉花を提供したものとされる。

一方、山西より更に交通の未発達な陝西では、既に見た通り棉花の市場開拓はより一層困難であった。乾州には、民国『乾県新志』巻五、業産、物産、貨産の項に、「土布は出品の大宗なり。本境服用以外、陝北・甘肅等処に行銷せらる」とあるように、最周縁部向けの土布業も存在したが、他県では概ね自給程度の生産しか行っていないかった。そこで陝西では余剰棉花を未加工のまま甘肅方面へ移出していた。『支那省別全誌』陝西省によると、渭南県と三原県の棉業について、

〔渭南〕

此地棉花の産多く、織布の業従つて盛なれ共、多くは女子の家内工業に属す。近来は官憲に於て斯業に注意し来れるを以て工廠の設立せらるゝものあり。現に官督商辦の織布局一個渭南東門外にあり。富秦工廠と称す。……需要向きは未だ僅に本地に限られ他に移出するものなきも、将来瞩目せられつゝあり（六一一—六一二頁）。

〔三原〕

山西、陝西の各地棉花を産する処少からずと雖も、紡績も織布術も未だ開けず、西安、三原に

織布業を営むものありと雖も、規模小にして大なる需要に応じ難く、其の大部は之を遠き地方より購はざるを得ず。従て運賃其他に多くの費用を要し、価格極めて高し（六三七頁）。

と記されており、棉産地では省政府の後押しにより織布業が勃興しつつあったが、生産額は極めて少なく、移出には至っていない。また『支那省別全誌』甘肅省を見ると、涇州・平涼・隆徳の移入品に関する箇所に、

棉は陝西省謂「渭」南、三原地方に産するものが直接当地に移入せらるるもの及び、西安商人の手を経て当地に来るものとあり。運送路は西安より咸陽を経て、当地まで馬車又は馬にて運ばるるを普通とす。馬車又は馬にて運ばるるものは百斤を一袋として荷造りす。此地貧窮者、原産地にて棉を安く購ひ、五十乃至八十斤を負ひ、以て当地に移入する者あり。其数も多く移入額大なりと云ふ（七一四頁）。

とあり、渭南や三原の棉花の多くは原棉のまま甘肅省へ移出されていたらしい。但し、『支那省別全誌』陝西省には、西安の状況について、

当地に於て販売せらるゝ綿布は実業司工廠に於て織出さるゝもの及び南方藍田県より来るもの多し。其他附近農家にて婦女子の内職として織出すものも少からず。但し藍田に於て綿布を織るものは凡て男工なりといふ（五五二―五五三頁）。

と述べており、藍田県には工場制手工業を彷彿させる賃労働を用いた織布業も勃興しつつあった。しかし総じて、陝西の新土布生産は山西のそれより低調であり、開港場はもとより最周縁市場へも原棉を移出する水準に止まっていた。

おわりに

華北東中部の直隸・山東・河南三省とは対蹠的に、華北西部の山西・陝西・甘肅三省では、灌漑が困難なことから、清末まで棉業がほとんど成長しなかった。ただ、山西省の汾水流域や陝西省の渭水盆地では、水利の便が比較的よい場所に僅かながら自給的棉業が根付いていた。ところが一九世紀後半、罌粟栽培が浸透したことにより、当地の脆弱な在来棉業は一旦解体された。しかし民国以降、両地域では省政府の罌粟栽培禁止政策と殖産興業政策により米棉や印度棉などの外来種を用いた近代棉業が興った。省当局は両政策を個々別々に実施したのであるが、結果的に近代棉業はアヘン生産の代替となり得た、換言すれば罌粟栽培撲滅の手助けとなったのである。もし罌粟に代わる商品生産が根付かなかつたなら、官憲が如何に弾圧を加えようとも、現金の確保に迫られた農民は罌粟栽培を止めなかつたであろう。一九世紀から二〇世紀前半期にかけて、華北西部の商品生産は自給的棉業からアヘン生産、更には移出向け棉花生産へと劇的に変化した。これが本稿の結論である。

民国期、山西は天津や漢口など開港場向けの棉花移出を伸ばしながら、余剰棉花を用いた省内市場や最周縁市場向けの新土布業も発達させた。しかし陝西では新土布業はほとんど成長せず、甘肅などの最周縁市場に向けても棉花をそのまま販売していた。そして甘肅では罌粟栽培の駆逐すら容易には進まず、陝西から原棉を移入して棉布を自製していた。三省において近代棉業発展の成否が分かれたのは、やはり降水量や気温など自然条件の差異によるものが大きいであろうが、棉花の販

路が開かれているか否かという社会条件の差異も少なくなかったものと思われる。山西では河運に加え石家荘より正太鉄道が延びていたのに対し、陝西では河運以外に輸送手段がなく、甘肅では河運さえ存在しなかった。現代では新疆ウイグル自治区が中国の有力な棉産地となっているが、鉄道の延伸がその発展を助長したのであろう。内陸部の商品生産は市場へのアクセスの有無がその発展の鍵となっているのである。

註

- (1) 以上の概況は、拙書『清代の市場構造と経済政策』名古屋大学出版会、二〇〇二年、『環渤海交易圏の形成と変容』東方書店、二〇〇九年による。
- (2) 新村容子『アヘン貿易論争』汲古書院、二〇〇〇年、後編第三章「清末四川省におけるアヘンの商品生産」。
- (3) 目黒克彦「光緒初期、山西省における罌粟栽培禁止問題について」『集刊東洋学』六二号、一九八九年、前註(2) 新村、後編第四章「中国アヘンをめぐる政策論争」。
- (4) アメリカ種葉煙草生産については、吉田滋一「二〇世紀前半中国の山東省における葉煙草栽培について」静岡大学『教育学部研究報告』人文・社会科学編、二八号、一九七七年、内山雅生「近代中国における葉煙草栽培についての一考察——二十世紀前半の山東省を中心として——」『社会経済史学』四五巻一号、一九七九年（内山『中国華北農村経済研究』金沢大学、一九九〇年所収）、深尾葉子「山東葉煙草栽培地域と『英米トラスト』の経営戦略——一九一〇～三〇年代中国における商品作物生産の一形態——」『社会経済史学』五六巻五号、一九九一年などの諸研究がある。在来種葉煙草生産については、まとまった研究を見ない。とりあえず『葉煙草』南満洲鉄道株式会社上海事務所、一九三九年を参照した。

- (5) 拙書『清代の市場構造と経済政策』第一〇章。
- (6) 前註(2) 新村、二八一—二八二頁。
- (7) 曾国荃『曾忠襄公奏議』卷八「申明栽種罌粟旧禁疏」(光緒四年正月二十六日)。
- (8) 張之洞『張文襄公全集』卷四、奏議四「禁種罌粟片」(光緒八年六月二日)。王金香「張之洞山西禁烟述略」『山西師大書報』社会科学版、一九八八年一期。
- (9) 『張文襄公全集』卷七、奏議七「陳明禁種罌粟情形摺」(光緒九年二月二日)。
- (10) 同右、卷五、奏議五「建倉積穀摺」(光緒八年六月二日)。
- (11) 前註(3) 目黒、一七七頁。
- (12) 左宗棠『左文襄公全集』奏稿卷五三「甘肅禁種罌粟請將查禁不力及實在出力各員分別懲勸摺」(光緒四年七月四日)。
- (13) 『光緒朝硃批奏摺』第一〇一輯、光緒三二年四月、護理陝西巡撫布政使張汝梅等によれば、陝西では棉花生産は極めて盛んであるが紡織業は未発達であり、陝甘兩省で毎年湖北産広布の移入に銀四、五百万兩を費やしているとある。陝西の棉作に関する張汝梅の認識には疑問が残るものの、棉花移入が地域経済を圧迫していたのは確かであろう。
- (14) 『農学报』第四八「晋省鴉片」(光緒二十四年九月下)。
- (15) 内田知行「一九三〇年代における閩錫山政権の財政政策」『アジア研究』二四卷七号、一九八四年。このアヘン税が閩錫山の軍事費の主要部分を占めており、華北西部諸省での棉花の代替生産は国民政府の地方軍閥に対する財政的締め付けをも企図していたと見る資料もある。『北支事情綜覧』南滿洲鉄道株式会社総務部調査課、一九三五年、一六六頁。
- (16) 『新修支那省別全誌』第八卷、新疆省、東亞同文会、一九四四年、三八四—三八五頁。
- (17) 平野虎雄・山本達弘「山西に於ける織布業に就て」『満鉄調査月報』二二卷一〇号、一九四一年、一七五頁。

- (18) 閻錫山『山西省政十年建設計画案』四〇葉表。なお『山西六政三事彙編』卷六、附録「種棉教科書」には、棉布購入費として毎年現洋銀二〇〇〇萬元以上が省外に漏出しているとある。
- (19) 山本達弘「平遙土布の生産形態(上)」『滿鉄調査月報』一三卷一號、一九四三年、三・七・八・九・一三頁。

(二〇〇九年一月二三日脱稿)